

日本語学習者による無動詞文の使用について  
ON THE USE OF VERBLESS SENTENCES IN L2 JAPANESE

下條光明, バッファロー大学  
Mitsuaki Shimojo, University at Buffalo, The State University of New York

## 1. はじめに

主語や目的語など日本語の項の省略（いわゆるゼロ代名詞）についてはその文構造的特性や談話機能等を論じた先行研究が多々見られるが、文の核をなす述語の省略については議論が少ない。本稿では、動詞、叙述形容詞や形容動詞などの述語が省略されている文を「無動詞文」と呼び、L1 日本語との比較をもとに、L2 話者によるフォーマルな日本語会話における無動詞文の使用について考察する。

## 2. 文要素の省略

一般的に、談話に基づく文の項省略は談話における継続情報や主題を表すとされる (Fry 2003, Hinds & Hinds 1979, Shimojo 2005, Suzuki 1995, Watanabe 1989)。

(1) に示すように、特に会話においては話し手や聞き手自身、またその他既知の継続情報を省略するのが自然である (例文の省略要素は括弧で表示)。

- (1) A: (あなた) ロフト行ったんでしょ? (ロフト) どうだった?  
B: (ロフト) よかった。明日も (私) (ロフト) 行く。

また、継続情報の表示という点でゼロ代名詞は文の主題と機能的に重複し、久野 (1973: 222) は「主語が省略されている文は、すべて「名詞句+ハ」(すなわち主題)の省略に由来する」と述べている。

一方、述語の省略は項省略とは性質が異なる。述語は文の叙述、トピックコメント構造であればコメントに関わる部分であり、省略された述語が主題を表すわけではない。(2B) や (3) ではそれぞれ「買った」と「来ている」が省略されているが、「買った」が先行発話からの既知情報を表してはいるが、それらの動詞が表す情報は文構造的にも語用論的にも主題とは言えない。

- (2) A: ロフト行ったんでしょ? 何買った?  
B: タンブラー (買った)。  
(3) [道を歩いている] あ、車 (来てるよ) !

しかしその一方でゼロ代名詞の場合と同様に、動詞の省略は文脈から復元あるいは推定できる場合に可能となる。(2B) の「買った」は「何かを買った」という前提のもと文の非焦点を表し (焦点の定義については後述)、(3) の場合、道を歩いている発話状況と「車」という注意喚起的発話から車が「来る」ことは推定可能と言える。ただし、述語形式で対者敬語が表されるため、フォーマルなスピーチレベルが意図される場合は述語の省略が不適格となる。例えば (4B)

で動詞が省略されるためには、BがAより上位である必要があり、同位関係、あるいは上下関係を考慮しないフォーマルな会話では述語の省略は不適格となる。

- (4) A: ロフトにいらっしゃったんですね。何かお買いになったんですか。  
 B: タンブラー。[Aより上位でなければ不可]

上の観察に基づけばフォーマルな会話では無動詞文は使用されないと予想されるが、本研究で分析したフォーマルな会話データでは L1、L2 話者ともに無動詞文を少なからず使用することがわかった。それらの無動詞文の分析をもとにその機能を探るとともに L1 と L2 での違いを考察、さらに統語理論 (Role and Reference Grammar) を用い L2 話者に使用される無動詞文のタイプ分けを試みる。

### 3. データ

データ分析には国立国語研究所の公開する日本語学習者会話データベース (<https://nknet.ninjal.ac.jp/nknet/ndata/opi/>) を使用した。本データベースは日本語学習者と日本語母語話者である面接者 (テスター) による、1 データあたり約 30 分の会話を集めたものであり、ACTFL-OPI の口頭能力試験の方式を利用し、テスターが全体の流れをコントロールしながら会話を進めるものである。このデータベースから L1 英語話者と日本語母語話者テスターのペア 4 組分 (L1 英語話者 4 名、L1 日本語母語話者 4 名の計 8 名; 総節数 1509) を分析対象とした。ACTFL-OPI による 4 名の学習者の日本語能力判定は上級中 1 名、上級下 1 名、中級中 2 名となっている。

本研究に関連するデータの特徴として以下の点が挙げられる。母語話者テスターとインタビューされる日本語学習者という立場上の違いや、会話ペアによってテスターと学習者との年齢差も異なると思えるが、会話中の表現からはそのような立場上の違いは特に感じられない。母語話者は、一部のインフォーマルな設定でのロールプレイを除き、ほぼ一貫して「です、ます」体を使用したフォーマルなスピーチレベルを使用している。また、丁寧語 (「申します」など)、尊敬語 (「ご存知ですか、お考えでしょうか」など)、謙譲語 (「教えていただけませんか」など) を率先して使用するテスターも見られた。学習者もおおむね一貫して「です、ます」体を使用しているが、言いたいことがうまく表現できない時などを含め、時折の辞書形の使用もみられた (後述の例 (13) 等)。前述の通り、スピーチレベルが述語で示されるため、このようなフォーマルな会話では述語の省略は起こりにくいと予測されるが、会話データでは L1、L2 ともに一定の範囲で述語の省略が観察された。

分析対象とする無動詞文は、フォーマルな日本語会話における自立した発話としては不完全な述語のない文と定義した。分析対象には (5.19E) のような動詞の省略に加え、(6.60E) のように叙述形容詞・形容動詞が省略されている場合も含めた。文中の名詞句は前者の「飛行機で」のように助詞を伴うものもあれば、後者の「『名探偵コナン』」のように無助詞のものもあった (助詞との関連については第 4 章で後述)。

- (5) 18J あー、そうですか、ミネソタ州から〈ん〉、あの日本に、来たときはど、どうやって、来たんですか  
 19E えと、ま、もちろん飛行機で (来ました) {笑}  
 20J はー、そうですね {笑}、はい [272 上級中]
- (6) 58J んーあ【名B】さんは日本の漫画が好きなんですか〈はい〉  
 59J へー特に好きな漫画ってあります  
 60E えー『名探偵コナン』(が好きです)  
 61J あーあテレビでもやっていますよね〈うんはい〉 [201 中級中]

ただし、(7.195E)のように与えられた文脈で「です」を補って適格となる発話、かつ「です」以外に補う動詞が文脈から推定できない場合は、叙述名詞文(すなわち「です」の省略)と解釈し分析の対象外とした。

- (7) 192J ホストファミリーの家族はどんな家族ですか  
 193E えーとーあお父さんはー〈ん〉しちじゅうにつきい〈ん〉  
 194E お母さんは68歳で〈んーん〉  
 195E あむすこーはえー44歳 [201 中級中]

### 3. 分析結果と考察

まずデータ全体での無動詞文の頻度を表1に示す。フォーマルな会話にもかかわらず、合計86例(総節数の6%)と数は多くないものの、L1で30例、L2で56例の無動詞文が観察された。また、統計的有意差は得られなかったが、全体では学習者、特に中級で頻度が高かった。また、L1では中級学習者とのペアで無動詞文が目立った(これについては本章で後述)。

表1 無動詞文の頻度(総節数:1509)

	上級	中級	合計
L1	12	18	30
L2	18	38	56

まずL1の無動詞文についてであるが、ほぼすべての場合で相手(学習者)の先行発話の繰り返しであることがわかった。(8.52J)では相手の学習者が「たぶん東京」と言った後で、母語話者が「東京」と繰り返している。このような繰り返しは、話者が新しい情報を提供し談話を発展させるものではなく、Tennen(1987)の言う shadowing 発話、すなわち会話を共有するためのラポール構築の機能を持った発話と言える。Kurokawa(2007)はこのような繰り返しにあいつちの機能があるとし、cooperative collaboration として話し手と聞き手が協力しながら談話を進めてゆくプロセスであると説明している。

- (8) 48J じゃあ今回来るまでもいろんなところにもう行ってるんですね  
 49E はい

50J へー, その中でどこが1番おもしろかったですか

51E ん, たぶん東京

52J 東京

53E はい

[201 中級中]

また、母語話者による無動詞文は相手（学習者）の発話の意味がつかみにくい場面での繰り返しにも見られた。(9)では、学習者がなぜアメリカのポップスよりも日本の音楽のほうが好きなのかを説明しているところであるが、その説明がうまくいかない場面(9.124J)で、母語話者が相手の発話を繰り返している。この繰り返しは相手に対する同意や丁寧さの表現(Makino 1982)、および相手の意図を理解するための情報を引き出そうとするあいづち的效果(Kurokawa 2007)があると言える。

- (9) 122E あーとか, あの一, あの一, 記憶, じゃない〈ん一〉, きお, 歌の言葉〈はい〉, もほん, と, あの一, なんか, のほうが一, ん, 元気が出たらあー {笑}, 〈ん〉,  
 123E アメリカ, の音楽, よく, あの一, なんか, 悲しい, 歌〈ん〉  
 124J 悲しい歌  
 125E 悲しい〈ん〉う歌とか, あの一, あ, 怒られる一〈あ一 {笑}, そ)人, の {笑} 〈なるほど〉, 歌, ですか [251 中級中]

繰り返しで使用された無動詞文の頻度(表2)を見てみると、L1で使用されるような無動詞文による繰り返しはL2では上級の学習者で6例のみで、L2での無動詞文全体のうち11%に限られている。L1では無動詞文が合計30例あったが(表1)、そのうち24例(80%)が繰り返しであった。また、L1では上級学習者相手との会話よりも、中級学習者相手との会話の方で繰り返しが多く使用され、中級学習者が相手の会話では、母語話者によるより一層のラポール構築、会話共有の姿勢が発話に示されていると考えられる。

表2 繰り返しの無動詞文の頻度

	上級	中級	合計
L1	6	18	24
L2	6	0	6

なお、L1による繰り返しでない無動詞文の使用は6例あったが、これらはすべて上級話者相手との会話で使用されており、くだけた会話でのロールプレイで使用されたものが3例、相手の名前を聞く場面での「お名前は」という質問が2例、発話の修復場面での1例となっている。

L2の無動詞文の大部分は、L1で観察されたような繰り返しとは対照的に、新しい情報を提供し談話を発展させる発話で観察された。前述の例(8.51E)では「たぶん東京」が先行発話の「その中でどこが1番おもしろかったですか」に対する答えとなっており、「Xが一番おもしろかった」の非焦点となる述語が省略

されている。つまり、この場面では「Xが一番おもしろかった」という前提が存在する文脈のもとで「東京が一番おもしろかった」という断定がなされており、断定から前提を除いた部分が文の焦点となるため (Van Valin 2005: 172)、文の焦点部分にあたる「東京」のみが発話されたことになる。このように、L2の無動詞文は焦点・非焦点といった文の情報構造と関わり、非焦点となる述語が省略されることで焦点部分の前景化につながっていると考えられる。

しかし、wh-疑問文を伴わない場合でも述語が非焦点となる場合がある。

(10.43E)は相手のyes-no疑問文に対する答えであり、「有名なイベントXがある」が前提となる。また(50E)では、先行する話者自身の発話「みんな試合を見にいく」(48E)を補足する発話となっており、「Xが試合を見にいく」が前提となっている。いずれの場合も省略された述部が文の非焦点を表している。

- (10) 42J あーそうですか〈うん〉, 【大学名C】で有名なイベントってありますか  
 43E んー, あ, あ〈ん〉, あのアメリカンフットボール〈あ〉の試合が  
 (あります) {笑}  
 44J あーそう  
 45E それは, やはり有名ですが  
 46J あそうなんですか  
 47E 【大学名C】のチームは〈はい〉, 強い〈んー〉, あー, ですから  
 48E あの, みんな〈ん〉\*\*, み, みんな, あの〈えーえー〉, この試合を〈ん〉見にいきます  
 49J あーそうですか〈はい〉, へー, そうですか  
 50E うん, たぶん10万〈ん〉, 人〈ん〉, 以上〈んー〉 (見にいきます)  
 51J あー, じゃ1年になんかいも, その試合がありますか [251 中級中]

さらに、省略された述語が文脈から推定可能な前提を表す場合もある。(11)の先行談話では学習者が日常生活で暇がないことについて話しており、その前提のもと通学に時間がかかることを説明している。(11.177E)で「学校と、勉強と」の述語が省略されているが、その先行談話から「忙しい」といった前提が推定可能であり、この例も前述の例と同様、述語が非焦点に対応している。

- (11) 173E 私は今【地名C】に〈はい〉, ホーストファミリーと住んでいますので〈えー〉  
 174E 片道で〈えー〉, 1時間半もかかりますので〈あー〉  
 175E それは, まあ1日3時間は電車乗る, とか〈んー〉  
 176E バスとか〈んー〉, その地下鉄の中に〈ん〉, 過ごすので〈ん〉  
 177E それ以外は〈ん〉, まあ学校と〈あー〉, 勉強と (忙しい)  
 178E そのあとは, あまり時間が, ないね〈あー〉  
 179E ま私は, 剣道部に入っていましたので〈えー〉 [272 上級中]

以上の観察をまとめると、L2 による無動詞文の使用は文の情報構造と密接に関係し、非焦点を表す述語を省略することで発話の焦点を前景化する機能を持つと言える。さらにその一方で、フォーマルな会話における無動詞文の使用がスピーチスタイルのずれを引き起こすにもかかわらず、新情報を提供し談話を発展されるための発話で無動詞文が使用されることは、L1 には見られない特徴であり、このことから L2 の無動詞文の使用には発話プロセス上の理由もあるとも考えられる。無動詞文は述語を含まないことで文構造の簡略化につながり、焦点部分のみを発話することで学習者の発話プロセス上の負担軽減につながっていると考えられる。この議論は学習者のゼロ代名詞の使用にもあてはまり、項の省略で発話の文構造が簡略化されるとする考え方と共通性があるが、ゼロ代名詞の場合は L1 と L2 で使用頻度にそれほど大きな差がないことが観察されている (Shimojo 2017)。しかし本研究の観察で重要な点は、L2 の談話では項の省略にとどまらず (フォーマルな会話で) 述語も省略されていることである。

上述の議論をさらに掘り下げるため、次章で無動詞文がどのように文構造の簡略化につながるかを、統語理論を使って考察する。これについては発話を産出する話し手の立場と発話を理解する聞き手の立場に分けて考える必要があり、話し手の発話プロセスにおける無動詞文産出のメカニズム、そして、聞き手の無動詞文理解のメカニズムをどのように説明するかが問題となる。

#### 4. 統語理論における無動詞文

無動詞文の理論的解釈として、述語を含む本来の文構造から述語を省略することで無動詞文を得るとする解釈も可能であるが、無動詞文の文構造にもともと述語を含まないとする立場も可能である。本稿では後者の考え方を支持し、無動詞文が述語を含まない簡略化された文構造を持つことで、学習者の発話プロセスの効率化につながると主張する。本章では Role and Reference Grammar [RRG] (Van Valin 2005) を使い説明を試みる。

ここで関係する RRG の理論的枠組みとして以下の特徴があげられる。まず、文の表示には、節構造、意味構造、談話構造、情報構造などの異なるレベルから同時に文を表示する平行構造を使用すること、つまり話し手による発話はこれらのレベルのインプットを同時に合わせて行われ、聞き手による発話の理解もこれらの異なるレベルを同時に使って行われる。また、統語構造は単層的であり、文を発話される形態そのままに表示し、いわゆる深層構造のような実際の発話文と異なる抽象的なレベルは使用しない。従って、発話における「省略」要素は節構造には含まれず、「省略」要素に対応する意味構造での要素を談話構造に直接リンクさせることで、節構造に存在しない「省略」要素を復元する。

図 1 は上述の無動詞文 (10.51E) を節構造、意味構造、談話構造の三つの表示レベルで示したものである。文構造は実際の発話「たぶん東京」を表し、意味構造 (動詞の意味の語義分解表示) はその発話で意図される意味「たぶん東京が一番面白い」を表している。談話構造は話し手と聞き手が共有する談話文脈を表し、この発話時点で存在する先行文脈からの前提、および現発話による断定を表示する。通常、意味構造と節構造の各要素が相互にリンクすることで文構造とその文

で意図される意味の対応が示されるが、談話に基づく省略要素（ゼロ代名詞や述語の省略）のある文ではそれらの省略要素が節構造にないため、意味構造と談話構造をリンクすることで省略要素を復元する。（10.51E）では図1に示すように意味構造における「一番面白い」が前提談話構造とリンクされ、この省略要素が談話から復元されることを示している。このように RRG では実際の発話に含まれない省略要素は節構造には含まず、簡略化された（無動詞文の場合は中核[**CORE**]に内核[**NUCLEUS**]を含まない）統語テンプレートを使用するため、省略による発話の効率化をうまく説明することができる。

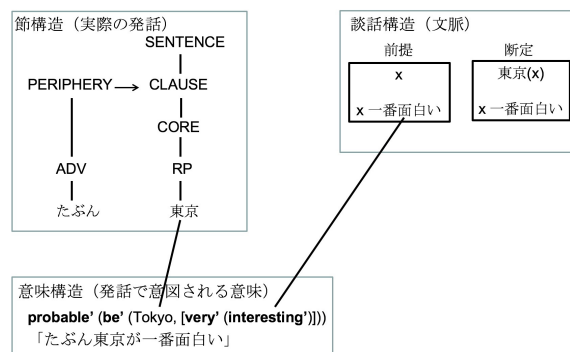


図1 RRGにおける無動詞文の表示 (10.51E)

これまで見た無動詞文の例はいずれも省略された述語が文脈から復元可能な場合であるが、L2の述語省略には意図される述語の復元が困難なため聞き手の理解に支障をきたすと思われる場合もあった。（12）は学習者が以前に読んだ小説の内容を説明しているところであるが、133E, 138E, 141Eのそれぞれの無動詞文では文脈から話し手の意図する述語を復元することが難しい。また、これらの場合では「です」を補っても発話の意味がなさないことがわかる。

- (12) 132E 本の中は、中学生で  
 133E あのーあ、{舌打ち} 高校に行くの、試験〈えーえー〉、入学試験〈えー〉  
 134E あー映画は、けっこう、おもしろい  
 135J あーそうですか  
 136E 映画も同じ  
 137E 高校から、大学生になる  
 138E そう大学生のその彼女は、医学部けっこう〈あー〉  
 139E すごく、あの、お母さんが、生き返ったみたいに〈あー〉、彼女は、自分ができなかったことをすごく一生懸命、勉強するから  
 〈あー、えーえーえーえー〉  
 140E あ、ん、いろいろ、おもしろいけど〈{笑}〉  
 141E たぶん大学まで、結婚〈えー〉  
 142E ごめん〈えー〉本がうま、つまらない [148 上級下]

ここでは(12.133E)の「入学試験」という発話を例とり、聞き手の発話理解のプロセスを図2に示す。発話理解では発話に含まれる述語や節構造をもとに話し手の意図する意味構造を構築するが、談話に基づく省略要素がある場合は談話構造から意味構造にリンクすることで復元する必要がある。しかしこの場合、聞き手は「入学試験」という名詞句そのものは意味構造の一要素として取り出すことができるものの、述語を復元するにあたって談話構造で該当する情報がなく意図される述語の復元ができない。意味構造の表示は、「状態・動作・到達・達成」などの動詞の語彙的アスペクトの分類(Vendler 1967; Dowty 1979)に基づくが、述語の復元ができないため意図される動詞のタイプも不明で、発話の意味表示が不可能となる。

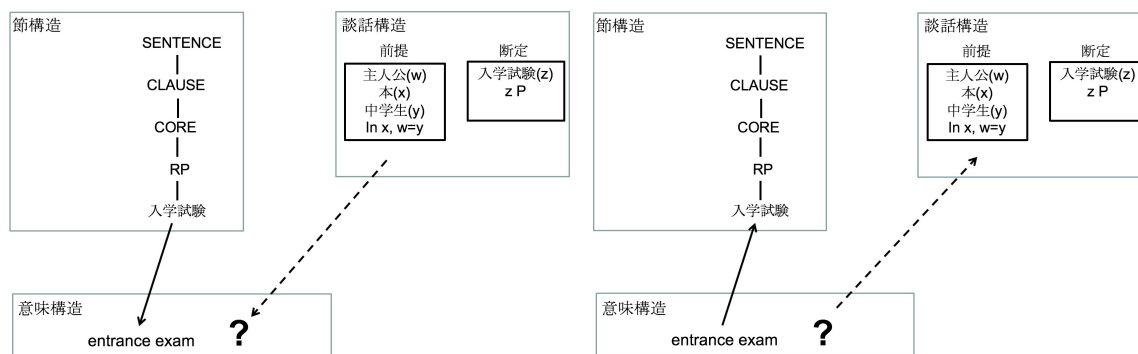


図2 発話理解のプロセス (13.133E)

図3 発話産出のプロセス (13.133E)

一方、話し手の発話産出プロセス(図3)では少なくとも「入学試験」という要素が意味構造(話し手の意図する意味)にあり、それが節構造に投射されている。省略された述語については、話者が意図した述語が意味構造にある場合とない場合の二通りが考えられる。述語も含めて話者が意図する意味構造の完全な表示があったとすれば、その述語が前提談話構造において復元できないためリンクが不可能となり、文が適格となるためには節構造にリンクされるべき(すなわち省略されずに節構造に投射されるべき)ということになる。これに対し、この「入学試験」の発話時に完全な意味構造がなかった場合、すなわち話し手が伝えるべき意味表示を完成させずに発話を行った場合は、談話構造にリンクされるべき(あるいは本来節構造に投射されるべき)述語要素が意味構造になかったために発話が不適格となる。

最後に、上の議論に関連して無動詞文中の非省略要素における助詞の使用について触れておきたい。表3に示すように、L2における復元困難な述語省略は合計18例あり、項や付加詞など発話中の非省略要素に助詞が使われている場合とそうでない場合があった<sup>1</sup>。一方、L2における復元可能な述語省略は合計38例で、こちらも同様に非省略要素に助詞が使われている場合とそうでない場合があった(表4)。

<sup>1</sup>最も高いレベルの学習者(上級中)では復元困難な述語省略がなかったことから、このタイプの述語省略と学習者の日本語能力との関連が示唆される。



表3 復元困難な述語省略の頻度 (L2のみ)

同一発話中の非省略要素	上級中	上級下	中級中	中級中	合計
助詞を伴わないもの	0	7	2	6	15
助詞を伴うもの	0	0	0	3	3

表4 復元可能な述語省略の頻度 (L2のみ)

同一発話中の非省略要素	上級中	上級下	中級中	中級中	合計
助詞を伴わないもの	2	3	13*	7**	25
助詞を伴うもの	3	3	3	4	13

\*うち5例で非省略要素が副詞または数量詞のため本来助詞を伴わない

\*\*うち1例で非省略要素が数量詞のため本来助詞を伴わない

表3、表4のいずれの場合も無動詞文中の非省略要素に助詞が使用されない場合（すなわち「無助詞文」）があり、これらの無助詞文は表面的にはその性質に違いがないように見えるが、統語理論にあてはめるとこれらの無助詞文に異なるタイプがあることがわかる。前述の通り RRG では、発話産出の過程を意味構造から節構造へのリンキングで表示するが、助詞の付与はこのリンキングの過程で述語の意味に基づいて文の意味構造を完成した後に行われる（Van Valin 2005: 279）。復元可能な述語省略（表4）の場合、まず意図する述語に基づいて意味構造を構築した後に助詞の付与を行うが、そこで特定の語用論的意図に基づき「付与しない」選択をした場合に無助詞文が産出される<sup>2</sup>。

復元困難な述語省略（表3）における無助詞文の場合、リンキングの過程で話者が意図する意味構造が完成されている場合は上述のプロセスが適用される。しかし、話者が意図する意味構造を完成させずに行った不完全な発話の場合、産出された無助詞文は、助詞を「付与しない」選択、すなわち語用論的意図によるものではなく、述語が不明で（述語の語義分解表示に基づく）文の意味構造が完成されず、そのために助詞の付与ができなかったと考えられる。表3に示すように、復元困難な述語省略の大部分が無助詞文であったことは、このタイプの無動詞文に意味構造の不完全な発話が少なからずあったことを示唆していると考えられる。

一方、述語が復元困難な無動詞文の中で非省略要素に助詞を伴うものが中級中の学習者で3例あったことは指摘に値する（表3）。これらの場合は話者の発話産出のプロセスにおいて意味構造が構築され助詞の付与が行われたものの、復元困難な述語が節構造に投射されなかったケースであると言える。この「投射エラー」がなぜ起こったのかは定かではない。しかし、このタイプの不適格文が特定の中級レベルの学習者に限られていたのは興味深く、第二言語習得過程との何らかの関わりがあるのかもしれないが、これについては今後の研究課題としたい。

<sup>2</sup> 無助詞文の談話分析に基づく語用論的機能の詳細については Shimojo (2005)、RRGのリンキング理論を使った説明は Shimojo (2009) を参照のこと。

## 5. 結論

本研究ではフォーマルな会話における L1 と L2 の無動詞文の使用について考察した。L1 の無動詞文はあいづち的な繰り返しにほぼ限られていたのに対し、L2 では焦点の前景化に関わる話者の語用論的意図を反映しているものが多かった。またこれらの無動詞文は節構造の簡略化にもつながっている。さらに L2 の無動詞文では、聞き手が省略された述語を復元できない場合も少なからずあり、これらの場合は、文脈や発話状況から復元不可能な、すなわち述語が省略されるべきではなかった場合と、話者の発話プロセスで意図する文の意味構築そのものに問題がある場合とに区別した。いずれの場合も、無動詞文を述語の省略としてではなく本来述語を含まない無動詞文として扱うことで、発話効率化のメカニズムを捉えるとともに、あいづちの発話以外で無動詞文が使用される L2 特有の傾向を説明するかぎになると思われる。

## 参考文献

- Dowty, David R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Fry, John. (2003). *Ellipsis and WA-marking in Japanese Conversation*. New York & London: Routledge.
- Hinds, John, & Hinds, Wako. (1979). Participant identification in Japanese narrative discourse. In G. Bedell et al. (Eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 201-212. Tokyo: Kaitakusha,
- Kuno, Susumu. (1973). *Nihon bunpoo kenkyuu (Studies in Japanese Grammar)*. Tokyo: Taishukan.
- Kurokawa, Naoko. (2007). Repetition in Japanese conversation in discourse. *ICU Studies in Japanese Language Education* 3, 65-79.
- Makino, Seiichi. (1982). Japanese grammar and functional grammar. *Lingua* 57, 125-173.
- Shimojo, Mitsuaki. (2005). *Argument Encoding in Japanese Conversation*. Hampshire and New York: Palgrave Macmillan.
- Shimojo, Mitsuaki. (2009). Focus structure and beyond: discourse-pragmatics in RRG. In Lilián Guerrero Valenzuela et al. (Eds.), *Studies in Role and Reference Grammar*, 113-141. México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Shimojo, Mitsuaki. (2017). What discourse analysis tells us about discourse-pragmatics in RRG. Paper presented at RRG 2017: The International Conference on Role and Reference Grammar. The University of Tokyo, Japan.
- Suzuki, Satoko. (1995). The functions of topic-encoding zero-marked phrases: a study of the interaction among topic-encoding expressions in Japanese. *Journal of Pragmatics* 23, 607-626.
- Tennen, Deborah. (1987). Repetition in conversation: toward a poetics of talk. *Language* 63(3), 574-605.
- Van Valin, Robert D. Jr. (2005). *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vendler, Zeno. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Watanabe, Yasuko. (1989). *The Function of WA and GA in Japanese Discourse*. Ph.D. dissertation, University of Oregon.